

論文

『南方熊楠全集』（平凡社）と書翰原本との異同

— 上松蒔宛・平沼大三郎宛書翰を中心に —

雲 藤 等*

はじめに

『南方熊楠全集』（平凡社、以下『全集』と略記）は、南方熊楠研究の根本的史料集として広く使用されているものである。

雲藤（2012、以下「前稿」）は、『全集』と乾元社版『南方熊楠全集』・翻刻原稿（南方熊楠顕彰館所蔵）・書翰原本（同）とを比較し、検討した。その結果、『全集』の一部には、書翰原本を改変する箇所のあることが判明したのである。その改変の要因は次の三つにまとめられる。

- ①誤読や行飛びのような単純な校正ミス、
- ②乾元社版全集の修正もれによる改変の残存、
- ③乾元社版全集を引き継ぐ意図的な改変

しかし、前稿では少数の代表的な事例に限定して考察したため、他の事例には言及できなかった。したがって、本稿ではさらに詳しく南方熊楠顕彰館所蔵（以下、顕彰館）の書翰原本と『全集』所収の書翰とを比較して、その異同を指摘してみたい。ただし、『全集』の書翰・論考を悉皆調査をするのは困難なので、ここでは『全集』9巻および別巻1に収録されている上松蒔宛書翰、平沼大三郎宛書翰などを中心に検討する。なお、「前稿」で紹介した事例は割

愛した。

上松蒔宛書翰の多くは、乾元社版の『南方熊楠全集』に収録されていないため、今回は『全集』と書翰原本との比較を中心とした。

以下、伊藤彌彦（2004）を参考にして、次のように整理した。

『全集』と書翰原本の異同箇所を[[『全集]]→[書翰原本]と表示した。頁と行数は、『全集』による。書翰原本は、雲藤が翻刻した。翻刻は、書翰原本のまま行い、読点も原文のままである。合字など一部パソコン上で表示できない文字は、そのままカタカナ表記をし、その後[合字]と記した。数文字分を繰り返す記号は、[繰り返し記号]と表記した。また、書翰原本には、『全集』で削除されていた部分、あるいは改変があった部分に下線を付した。

1、『南方熊楠全集』9巻（1995年、初版第13刷を使用）

進献進講関係書簡（437-496頁）

大正15年 書翰番号1

437頁

(1) 7行目「元来この種は(1) 図のごとく」

→「元来此種ハ左ノ図ノ如ク」

*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程6年（指導教員 島 善高）

(2) 8-9行目「邸のは(2) 図のごとく [略] その円柱体は(3) 図のごとく」 → 「邸ノハ図ノ如ク [略] 其円柱体ハ下図ノ如ク」 [これは、図の表記の問題と関わる点である]

438頁

(3) 1行目「不思議と申すのは」 → 「不思議ト申スハ」 [書翰原本には、「の」がない]

(4) 2行目「多くは(4) 図のごとく」 → 「多クハ上図ノ如ク」

(5) 7行目「スウスウ、フンフン」 → 「スウ [繰り返し記号] フン [繰り返し記号] [繰り返し記号]」

(6) 16行目「かの件の形を団体的に現出し、」 → 「彼件ノ形チサエ多ク現スレハ事ガスムトイフ了見デ右ノ如ク多クノ彼件ノ形ヲ団体的ニ現出シ」 [書翰原本の下線部が『全集』では、脱落している。これは、行飛びだと思われる]

(7) 18行目「と申すは左図甲のごとく」 → 「ト申スハ上図ノ如ク (甲)」

439頁

(8) 17行目「得々たる風あり」 → 「得々タルノ風アリ」 [書翰原本にある「ノ」の文字が『全集』では脱落]

440頁

(9) 13行目「命名したるらしく候」 → 「命名シタラシク候」 [『全集』にある「したるらしく」の「る」は書翰原本にはない]

(10) 15-16行目「日本人を笑いの的としたようなものを出し」 → 「日本人ヲ笑ヒノ的トシタヤウナモノヲシ出シ」 [書翰原本では、「出し」ではなく、「シ出シ」とある]

442頁

(11) 13行目「別所影善氏」 → 「別所彰善氏」

443頁

(12) 4行目「粘菌をとり送られ候を」 → 「粘菌ヲトリ贈ラレ候ヲ」

書翰番号2 平沼大三郎宛

443頁

(13) 18行目「事すみ、実は何とも」 → 「事スミ候ハ何トモ」 [『全集』で「実」とあるのは「候」だと思われる]

444頁

(14) 3行目「先方から出した」 → 「先方ヨリ [合字] 出シタ」

(15) 6行目「外国人より見たら」 → 「外国ヨリ [合字] 見タラ」 [書翰原本に「人」は無い]

446頁

(16) 1行目「phy-sarum とは切らぬなり」 → 「phy-sarisトハキラスナリ」

(17) 17行目「何とかして」 → 「何レカニテ」

書翰番号3 上松菴宛書翰

447頁

(18) 17行目「イタリアの菌学者宿プレサドラ師」 → 「伊太利ノ菌学老宿プレサドラ師」

448頁

(19) 3-4行目「一回三ドル五十セントずつ予約出板するなり」 → 「一回三弗五十仙ツ、デ豫約出板スル也」 [書翰原本にある「デ」が『全集』には脱落]

450頁

(20) 8行目「これは完成せるものなるや」 → 「コレハ完成セルモノニ候ヤ」

書翰番号4 上松翁宛書翰

450頁

(21) 15行目「盆栽の草木を持ち出し」→「盆栽エノ草木ヲ持出シ」

書翰番号5 平沼大三郎宛書翰

454頁

(22) この書翰では、以下の追記部分が削除されている。

「拙児朝九時頃起キ夜ノ八九時ニ臥シソレヨリ
[合字] モ時々オキ出候小生ハ日中ハ全タク長屋ニテ番シ居リ(小生居ル処ヲハ憚カリテ来ラヌ故)外出セヌ様フセギ昨日ヨリ [合字] ハ外出自ツト止ミ申候此長屋ハ昔シ此田辺藩主ガイツモ江戸ニ居リ領地ハサムライニ預ケキリナリシ故人民ヲ苛求スルコト [合字] 甚シク為メニ所蔵品ガーツデモ見エヌヤウ家ヲナルヘク低ク^{クラ}暗ク立テタルナリ(二階立チハ全ク無リシ)ソノマ、此長屋ガ今ニアルノテ秋冬中ハ全クノ暗室ナリソレヲ通りテ拙児が外出スル故通サバル為メニ戸ヲ閉ザアル故全ク以上ノ暗室ナリ纔カニ光リノモル、方ニ向ヒ読書抄記スル計リナリ、扱拙児寝テ後ヤツト書齋ニユキ鏡檢致シオル、故ニ時間ヲ空費スルコト [合字] 夥シクコマリ居リ候」

[精神病を患う長男熊弥に関する記事なので削除したものと推測される]

書翰番号6 平沼大三郎宛書翰

455頁

(23) 2行目「楯籠るようなことあらば」→「楯籠ル様ノ事有テハ」

[ここは微妙な箇所であるが、「ラ」よりも「テ」の方が近いと思われる]

456頁

(24) 6行目「一通り他の原始動物をさるべしとか」→「一通り他ノ原始動物ヲ研究サルヘシトカ」

(25) 11行目「などに動物を分類」→「ナト、動物ヲ分類」

(26) 12行目「今に粘菌で通り、」→「今ニ粘菌デ通り居リ」

(27) 13行目「冬虫夏草などに誤解さるべくもやと差し控いおり候」→「冬虫夏草ナド、誤解サルベクモヤト存ジ差控エ居リ候」

457頁

(28) 7行目「口なきものは自体の諸部がみな突出して」→「口ナキモノハ身体ノ諸部ガミナ突出シテ [合字]」

458頁

(29) 18行目「この理由によりて」→「此理由ニ暗クテ」

[この書翰も以下の追記が削除されている]

(30) 「拙方ノカキノ木ノ皮ニハ貴方ニアリシ通りノ *Hemitrichia minor* ガ夥シク生ジ居リ候兎ヲカヒテ其糞ニ希有ノ粘菌 *Perichaena corticalis* var. *liceoides* Lister; 等ガ生スルヤト窺ガヒ居レト今ニ生セズ候、

拙女ハ前日恩賜ノ衣服地ヲツヅラニ仕マヒオキ試験ノ下サラヘヲ致シナガラ何度トナクノゾキ見居リ候兄ガ来リテトリ出シ猫ナド包マレテハ一大事トヨク [繰り返し記号] 用心致シ居リ候長々ノ病人マコトニ小生夫妻共疲レ甚シク候、」
[この部分も長男熊弥「文中「兄」のこと」に関する記事があるため、削除したものと推測される]

進献進講関係書簡 昭和4年

書翰番号2 服部広太郎宛書翰

464頁

(31) 17行目「二十三日付の御状」→「廿三日附ケ御状」[書翰原本には、「の」は無い]

465頁

(32) 7-8行目「わけの判った人」→「ワケノ別ツタ人」[書翰原本は「判」ではなく「別」の文字を使用している。熊楠は「わかる」という場合、「別の」と書くことがある。『全集』別巻1, 302頁にも同様の用例があり、ここでは「^{わか}別り」として、わざわざルビも振っている]

(33) 11-12行目「その樹の陰には今も魚類」

→「其樹ノ蔭ニテ今モ魚類」

(34) 14行目「小生この島に見出しおり候」→「小生此島ニテ見出シオリ候」

(35) 19行目「月を賞せられんとする企てを」→「月ヲ賞セラントスル企テヲ」

[書翰原本には、「せられんと」の「れ」はない、これは編者が補った可能性がある]

466頁

(36) 8行目「樹林鬱生」→「樹木鬱生」

467頁

(37) 3行目「捕獲後二十数年」→「捕獲後二十餘年」

書翰番号7 上松翁宛書翰

482頁

(38) 5行目「検分に下られしほどのものが」→「検分ニ下ラレ [ル?] ホドノモノガ」[書翰原本に「し」はない]

483頁

(39) 8行目「その前九時までに」→「其前九時過ニ」

(40) 10行目「これがため」→「ソレガ為メ」

(41) 11行目「名義人柳田」→「名義ハ柳田」

2, 『全集』別巻1 (1991年, 初版第10刷のものを使用)

上松翁宛書翰 (5-313頁)

書翰番号20

55頁

(42) 1行目「多数の種子を」→「多種ノ種子ヲ」

(43) 16行目「他の小市よりも」→「其他ノ小市ヨリ [合字] モ」

56頁

(44) 19行目「まことに短きこの世に望むべきことにあらねど、」→「マコトニ短カニ此世ニ望ムベキコト [合字] ニ非ネド」

[[短カニ]では文意がうまく通らないので、「短き」にしたものと推測される]

57頁

(45) 8行目「右の脂をぬりこみ」→「右ノ脂ヲスリコミ」[[「ス」と「ヌ」はくずし方が似ており、区別が難しいが、ここは「ス」である]

書翰番号21

58頁

(46) 17行目「種^うゆるといふ何たる深意あるにあらず」→「種ユルトイフコト [合字] 何タル深意アルニ非ズ」

59頁

(47) 4行目「存じ候。(このベッチは粘菌学者 [以下略])」→「存候ヘトモ [合字] 何トカシテ [合字] 前方望ミノモノヲ遣ハシテ頼ミ可見候 (此ベッチハ粘菌学者 [以下略])」

[下線部が、『全集』では削除されている]

60頁

(48) 4行目「一分時も惜しまる。」→「一分時
モ惜マル、」[「、」を読点とした誤読]

61頁

(49) 5行目「朝に心がけて夕に吹聴するごと
きは、」→「朝ニ心カケテ夕ベニ風聴スル如
キハ」[明らかに「吹」ではなく「風」である]

(50) 7-8行目「われはこの問題を攻究中な
りと出したるを」→「吾ハ此問題ヲ攻究中也
[繰り返し記号]ト出シタルヲ」[『全集』は、
繰り返し記号を無視している]

(51) 8-9行目「人に洩らすべきものにあら
ず、」→「人ニ洩スヘキモノニ非ジ、」

(52) 12行目「小生むしろ一切」→「小生ハ
寧ろ一切」

(53) 13行目「成功の一半を失い申し候。」→
「成功ノ價ノ一半ヲ失ヒ申シ候、」

(54) 15行目「その事、その口より出づと分かっ
ても」→「其事貴口ヨリ[合字]出ズト分ツ
テモ」

62頁

(55) 4行目「味は素人には分別出来ぬ」→
「味ハ素ウ人ニハ分別出来ヌ」

63頁

(56) 15行目「獅子を打ち殺せしに」→「獅
ヲ打殺セシニ」[書翰原本には、「獅子」の「子」
の文字はない]

64頁

(57) 3行目「日本にては西洋とかわり」→
「日本ニハ西洋トカハリ」[書翰原本に、「にて
は」の「て」はない]

(58) 14行目「人の話を聞き分ける稽古に」→
「人ノ語ヲ聞キ分ル稽古ニ」

[「語」を『全集』では「話」と誤読している]

(59) 18行目「日本で申さばテニヲハ」→「日
本デ申サバテニオハ」[書翰原本の「テニオハ」
ではおかしいので、「オ」を「ヲ」に直している]

書翰番号22

65頁

(60) 11行目「『増見遊覧記』は白井真澄という
著者、奥州人らしく」→「増見遊覧記ハ白井
眞澄トイフ著ニテ奥州人ラシク」

[『全集』で「著者」となっている部分は、「著
ニテ」で「者脱カ」くらいの注記が必要。おそ
らく『全集』では、「ニテ」の部分を無理に「者」
と読んだものと推測される]

(61) 12-13行目「『東西遊雑記』と申す」→
「東西遊記ト申ス」[書翰原本に、「雑」の文字
は無い]

66頁

(62) 11行目「邦人の軽薄にあきれはて」→
「邦人ノ軽薄ニアキハテ」

[「アキハテ」ではおかしいので、「あきれはて」
と「れ」を追加したのかもしれない]

書翰番号35

94頁

(63) 7行目「一昨日(十二日)」→「一昨々
日十二日」

(64) 12行目「大王みずから訴えを判じ」→
「大王自ラ其訴ヘヲ判ジ」

95頁

(65) 4行目「夏禹王の姉たりという」→「夏
禹王ノ師タリトイフ」

(66) 13行目「古く正しき発音と判る」→「古
ク正シキ発音ト別ル」[(32)と同じ例]

(67) 18-19行目「球」→「珠」

97頁

(68) 7行目「いよいよ上り申すべく候」 → 「イヨ（繰り返し記号）上り申候」

『全集』では、書翰原本の「上り」の「リ」を「可」と誤読したものと思われる]

(69) 7行目「和歌山辺は当地とちがい、」 → 「和歌山辺ニハ当地トチガヒ」

99頁

(70) 1 - 2行目「和歌山市より打ち出る久世豊忠とやりあうらしい」 → 「和歌山市ヨリ [合字] 打出ル、コレハ久下豊忠トヤリアフラシイ」

『全集』には、「コレハ」が抜け、人名も久世ではなく久下が正しい。久下豊忠は、和歌山新報社主で、大正9年には衆議院議員になっている]

(71) 9行目「食事等のことは小生幼時よりの好友あれば」 → 「食事等ノコト [合字] ハ小生幼時ヨリ [合字] ノ好友多少アレハ」

『全集』では、「多少」が脱落している]

書翰番号39

116頁

(72) 1 - 2行目「小生も実弟より道を切られ大いに究乏しおる」 → 「小生モ家弟ヨリ [合字] 途ヲ切ラレ大ニ究乏シ居ル」

(73) 4行目「大朝社の重役たる人が、亡父以来知人なる小生に」 → 「大朝社ノ重役タル人が其亡父以来知人ナル小生ニ」

『全集』では、「其」が脱落]

118頁

(74) 2行目「藤堂とか板倉など」 → 「藤堂トカ松倉ナド」

[ここは、関ヶ原以後、徳川家康が譜代大名よ

り外様大名を厚遇する傾向があることを述べる文脈であるから、「板倉」（譜代大名）ではなく、「松倉」（外様大名）とならなければいけない]

書翰番号43

132頁

(75) 13行目「万一病人が家出せずやと見張り番致しながら」 → 「万一病人ガ家出セズヤト見張り番ヲ致シナガラ」[『全集』では、「ヲ」が脱落]

133頁

(76) 12行目「小生はこの地に親族というもなく」 → 「小生ハ此地ニ親族トテモナク」

(77) 15行目「まずは数日前申し上げたるハガキの補いに」 → 「先ハ数日前差上タルハガキノ補ナヒニ」

134頁

(78) 8行目「またまた多くなることと存じ候」 → 「マス [繰り返し記号] 多クナルコト [合字] ト存候」

(79) 11行目「当地過ぐる二週間ばかり雪しばしばあり、」 → 「当地過ル二週間計リ雪シバ [繰り返し記号] フリ」[書翰原本では、「あり」ではなく「フリ」となっている]

(80) 13行目「今に地震断えず、ほとんど毎日のようになりおり申し候」 → 「今ニ地震断エズ殆ンド毎日ノヤウニアリ居申候 [あるいは、「アリ居り候」の可能性もある]

(81) 13-14行目

「これは一つはきわめて精細なる観測機をそなえ付けたるあり。従前の機械に感ぜざりしほどの微なる地動も地震のごとくに感ぜられ」 → 「コレハーツハ極メテ精細ナル観測機ヲソナエ付タルニヨリ従前ノ機械ニ感セサリシホドノ微

ナル地動モ地震ノ如クニ感セラレ」

書翰番号44

135頁

(82) 5 - 7行目

「固形体を見るときは、反射鏡を載物台より上にまわせば光線斜めにさして物が明らかに見える。[中略] 反射鏡面より光線が穴を通してプレパラートを射るゆえ、透明によく見えるなり」 → 「固形体ヲミルトキ [合字] ハ (イ) ナル反射鏡ヲ (ロ) ノ如ク (ハ) ナル載物臺ヨリ [合字] 上ニマハセバ光線斜メニサシテ物ガ明カニ見エル [中略] (マ) ナル反射鏡面ヨリ [合字] 光線ガ (カ) ナル穴ヲ通シテ [合字] プレパラートヲ射ル故透明ニヨク見エルナリ」 [書翰原本には、顕微鏡の図があるのだが、『全集』では、それを注記なしに省略している。そのため、熊楠が図を参考にして説明している箇所も無断で改変しなければならなくなっている。(イ) (ロ) (ハ) (マ) (カ) は、熊楠が図に注記している記号である]

(83) 11行目「なおここにある顕微鏡」 → 「拙方ニアル顕微鏡」

[[「なおここ」と翻刻されている箇所は、「拙方」の二文字である。おそらく「拙」の文字を「猶」と誤読したものと推測される]

(84) 12行目「今夜よりやや静まったらしく候」 → 「今夜ヨリ [合字] ヤ、静マツタラシク御座候」

(85) 13行目「今年暖かくなれば」 → 「今年ハ暖クナラハ」

書翰番号45番

136頁

(86) 17行目「顕微鏡を送り下さるるはずなり、集光器はすでに当地へ着しあり」 → 「顕微鏡ヲ送り下サル、筈ニテ集光器ハ既ニ当地ニ着シアリ」

(87) 18-137頁1行目「かかる学問は必ずしも高等中学や大学を経ねばならぬものにあらざ」 → 「カ、ル学問ハ必スシモ高等中学ヨリ [合字] 大学ヲ経ネハナラヌモノニ非ズ」

137頁

(88) 2行目「上松、平沼、宮武、中道その他諸友が」 → 「上松平沼宮武中森其他諸友ガ」

(89) 11-12行目「おいおいと悴も記憶力、観察力を恢復して」 → 「オヒ [繰り返し記号] ハ悴モ記憶力観察力を恢復シテ [合字]」

[熊楠の「ハ」は「ト」に形が近いが、書翰原本の文字は「ハ」である]

(90) 12行目「知人Westが父子にて英国の」 → 「知人Westガ父子デ英国ノ」

[ここは、濁点があるので確実に「デ」である]

(91) 13行目「果たして左様に事行くべきや」 → 「果シテ [合字] 左事行クヘキヤ」

[書翰原本では、「左」の次には書き損じと思われる部分があるがそれは「様」とは読めない。編者が「様に」を補った可能性がある]

138頁

(92) 5行目「拙妻は十二月来の拙児の永き発作つづきに脳を煩い」 → 「拙妻ハ十二月来ノ拙児ノ永キ発作ツヅケニ脳ヲ煩ラヒ」

[これは誤読ではなく、書翰原本の「ツヅケ」では若干おかしいので「つづき」としたものと推測される]

(93) 11行目「これらからちょっと写生せしめ」

→ 「コレカラ写生セシメ」

『全集』の「ちょっと」という言葉は、書翰原本には無い。これは「写」という文字を分解して「一寸（ちょっと）」と誤読し、さらに同じ文字を二度使って「写生」と読んだものと考えられる]

書翰番号46

139頁

(94) 17-18行目「それがなくては粘菌図譜の編纂上不確かを生じ申すべく候」→「ソレガナクテハ粘菌図譜ノ編纂上大ニ不確かヲ生ジ可申上候」

『全集』では、まず「大ニ」が脱落している。また、書翰原本では「可申上候」となっているから、『全集』の方針だと「申し上ぐべく候」としなければならぬ]

書翰番号47

140頁

(95) 7行目「しかしまだなかなか写生は出来ず」→「然シ未ダ中々写生ハ出来ズ」

「未」を平仮名の「ま」と読んだものと思われる。しかし熊楠は片仮名で書くので、ここは「ま」ではなく「未」の漢字のままである。『全集』の方針だと「いまだ」とすべき箇所であろう]

(96) 8行目「日々少しずつ教えおり申し候も」→「日々少々ツ、教エオリ申シ候モ」

「少し」と読むか「少々」と読むか、難しいところであるが、「シ」ではなく、一文字の繰り返し記号だと思われる。

(97) 17行目「早々敬具」→「匆々敬具」

書翰番号48

141頁

(98) 12-13行目「小生にかくれてまでもことごとく焼き出し」→「小生ニカクレテ迄モ悉ク焼亡シ」

「亡」を「出」と誤読したものと思われる]

142頁

(99) 8行目「利根川岸（中田、幸手、古河、栗橋辺）の沼沢は微藻採取せばおびただしくあることと存じ候」→「利根川岸（中田幸手古河栗橋辺）ノ沼澤ハ微藻採集セバ夥シクアルコト、存候」

(100) 17行目「大王は仙台にてまた一新種立派なものを見出だされ申し候」→「大王ハ仙臺ニテ又一新種立派ナモノヲ見出サレ候」

『全集』にある「申し」という文言は、書翰原本にはない]

書翰番号49

143頁

(101) 11行目「(追記、上松翁より教示……)」→「(追記、上松翁ヨリ[合字]教示ニ……)」

書翰番号50

144頁

(102) 6行目「(只今台湾アズキと申し、半ば朱赤半ば漆黒なる)」→「(只今ハ臺灣アヅキと申し[図]コレホドノ半バ朱赤半バ漆黒ナル)」

[この書翰も図を省略したため、「コレホドノ」という語句を抹消している]

145頁

(103) 4行目「なにとぞ図中虚線にて示すように」→「ナニトゾ図中虚線テ示スヤウニ」

[熊楠の「ニテ」(ニとテが融合して、合字のよ

うになっている)と「テ」は判別が難しい文字の一つであるが、ここでは濁点が見えるので確実に「テ」である]

書翰番号51

146頁

(104) 12-13行目「みずから写生観測して一日一、二時間を過ごす」→「自ラ写生観測シテ
[合字] 一日ニ一ニ二時間ヲ過ス」
[『全集』では、書翰原本にある「に」が脱落している]

書翰番号52

148頁

(105) 14行目「東京より来たれる奇特の魔術博士とか神秘療法とかあれば」→「東京ヨリ
[合字] 来レル奇特ノ魔術博士トカ神秘療方トカアレハ」

書翰番号54

155頁

(106) 12行目「姉は三弦をひくうち卒死したる例もあり、到底長生はむつかしと存じ候。只今書きおる「続々随筆」は」→「姉ハ三絃ヲヒク内卒死シタル例モアリ到底長生ハ六カシト存ジ只今書キオル、続々随筆ハ」

[『全集』で「三弦」となっている箇所は、書翰原本では「三絃」、おそらく単純なミスであろう。また「存じ候」と翻刻している箇所は、書翰原本に「候」は無い]

156頁

(107) 10行目「今夜はこれにて筆を中止致し候」→「今夜ハコレデ筆ヲ中止致候」
[ここも濁点が見えるので確実に「テ」である]

(108) 17行目「拙児より早く熟睡しおり」→「拙児ヨリ [合字] 早く熟眠シオリ」

書翰番号55

160頁

(109) 7-9行目「胞子面のあみめが不等大というよりも不整正ということを示す方が一層宜しかるべきゆえなり。[※] 実際は不等大の上に不整形なれども不整形の方がことに目立ちたる特徴に候」→「[※] の箇所以下以下の文が書翰原本にはある。「[図] inequalis アミメノ大サガチガフ [図] irregularis アミメの形チ [図] コノ如ク正整ナラズ [図] コンナニユガミオルト申ス也」

(110) 11行目「名筆の人を頼み看板にかかすはずなり」→「名筆ノ人ヲ頼ミ看板ニカ、スル筈ナリ」

(111) 12行目「堂鳩は」→「堂鳩トハ」

161頁

(112) 1-2行目「報恩とまでゆかずとも感謝、復讐とまでゆかずとも」→「報恩ト迄ユカズトモ [合字] 感謝、ナルカ復讐ト迄ユカズトモ [合字]」

[書翰原本で、「ナルカ」は横に小さく書かれているので、『全集』では無視した可能性もある]

書翰番号56

163頁

(113) 8行目「*Hypomyces*が寄生せしかとも思う」→「*Hypomyces* ガ寄生セシモノカトモ思フ」

(114) 12-13行目「学識はもはや老耄せしものなれども」→「学識上ハモハヤ老耄セシモノナレドモ [合字]」

165頁

(115) 9-10行目「四十二年の松林が今も旧態を改めざるを見て」 → 「四十二年前ノ松林ガ今モ旧態ヲ改メザルヲ見テ」

(116) 11行目「身をかへてひとり帰りし故里に昔に似たる松風そふく」 → 「身ヲカヘテひとり帰りシ故里ニ昔ニ似タル松風ゾフク」

[書翰原本には、「ゾ」と濁点をうっている]

166頁

(117) 3行目「川上采女という武士が大和より落ち来たり日高奥城に居せしが後裔とききしことあり」 → 「川上采女トイフ武士ガ大和ヨリ [合字] 落ち来り日高奥ニ城居セシガ後裔トキ、シコト [合字] アリ」

167頁

(118) 12-13行目「さて暫時にしてまた長くのびてはえまわり、前後に切りはなされたる」 → 「扱暫時ニシテ [合字] 又長クノビテハヒマハリ、前後ニ切りハナサレタル」

[書翰原本では、「ハヒマハリ」とあり、『全集』の方針では、「はいまわり」としなければならぬはずである。「ヒ」を「エ」と誤読したものと思われる]

書翰番号57

169頁

(119) 10行目「妹尾字の西川氏宅の三階」 → 「妹尾字ノ西川氏宅ノ三階」

(120) 14行目「高等菌を三種図記致し、総数三百八種を得申し候」 → 「高等菌ヲ三種図記故ニ総数三百八種を得申候」

170頁

(121) 7行目「小生ごとく一生放浪する人間には」 → 「小生如キ一生放浪スル人間ニハ」

書翰番号59

173頁

(122) 13行目「御頼み申し上げる用件あれども後状にて申し上げべく候」 → 「御頼ミ申上ル用件アレドモ [合字] コレハ後状モテ可申上候」

書翰番号60

174頁

(123) 3-4行目「強度の電気をかくる必要ありとかにて」 → 「強度ノ電気ヲカクル必要アリトカノコト [合字] ニテ」

(124) 4-5行目「かつ家狭きがため住まうことならず」 → 「且ツ家狭キガ為メ住マルコト [合字] ナラズ」

[書翰原本は「住マル」となっている。これを意味が通りやすくするために「住まう」と改変したものと思われる]

(125) 14-15行目「平沼氏へちよっと手紙を差し上ぐることならぬやも知れず」 → 「平沼氏ヘ一寸手紙ヲ差上ルコト [合字] ナラヌカモ知レズ」

(126) 16-17行目「近々また旧友中井氏なる人」 → 「近ク又旧友中井氏ナル人」

書翰番号61

176頁

(127) 6行目「そのあとへ嫁ぐはずと申し来たり候」 → 「ソノアトエ嫁スル筈ト申シ来り候」

書翰番号63

178頁

(128) 13-14行目「脅迫して捺印を求めあるを聞いて、警察書に通知して」 → 「脅迫シテ

[合字] 捺印ヲ求メアルク因テ警察署ニ通知シテ [合字] [書翰原本の「因」を「聞」と誤読したものと推測される]

書翰番号64

181頁

(129) 9行目「梅原北明」→「梅原盛明」
[この人名は、『全集』の方が正しいのであるが、書翰原本は「盛明」となっている。全集の方針が正しい名前に変えるというのなら、問題は無いが、通常は、「^北盛明」とする]

書翰番号65

184頁

(130) 4行目「一日か二日の間はやすにて」→「一日カ二日ノ間ダハヤラスニテ」
[書翰原本の「ハヤラス」では意味が分かりにくいので、『全集』では「はやす」とした可能性がある]

(131) 7行目「一昨年冬に拙女和歌山赤十字病院に」→「一昨年冬拙女和歌山赤十字病院ニ」

[『全集』にある「冬に」の「に」は、書翰原本には無い。「冬」の「にすい」(点の部分)を「ニ」と読んだ誤りと推測される]

(132) 8-9行目「ことのほか逼迫せる患者なるゆえ」→「殊ノ外逼迫セル患者アル故」
[熊楠の文字「ナ」と「ア」は、区別が難しいのであるが、ここではおそらく「ア」で文脈上も適当であると考えられる]

書翰番号66

187頁

(133) 3行目「まち望みおりたるに候」→

「マチウケ居タルニ候」

188頁

(134) 5行目「歩くごとに」→「歩ム毎ニ」

書翰番号71

201頁

(135) [書翰原本には、後半部に簡単な図があるが、注記なしで省略されている]

書翰番号72

202頁

(136) 12行目「右次第で」→「右ノ次第デ」

書翰番号73

206頁

(137) 6行目「己れその館長となるちうとの魂胆なり」→「己レ其館長ト成ントノ魂胆也」
[ここは、書翰原本の「ント」を「チ」と読み、「ノ」の部分「フ」と読んで、「チフ」(「ちう」と読んだ誤りと推測される)]

(138) 11行目「なおいろいろと対策を講じおる様子」→「ナホ色々ト愚策ヲ講シ居ル様子」
[ここは、明らかに「対」とは読めない]

書翰番号76

212頁

(139) 16行目「同六日朝八時三十五分承見」→「同六日朝八時卅五分拜見」
[『全集』の「承見」は「拜見」の間違い]

書翰番号78

218頁

(140) 15行目「告訴取り下げ、このことすみしなり」→「告訴取下ゲニテ事スミシ也」

220頁

(141) 7行目「また訂正なせるいろいろの著書を出し」 → 「又訂正シタル色々ノ著書ヲ出シ」

書翰番号80

225頁

(142) 2行目「(確かに申さば今日午前二時ごろ)より」 → 「(確カニ申サハ今日午前二時頃ヨリ [合字]) ヨリ [合字]」

[括弧を挟んで、二つの「ヨリ」があるため、一つを省略したのかもしれない]

書翰番号81

228頁

(143) 4行目「ちょっと暇に乗じて」 → 「一寸暇ニ乗ジ」[書翰原本には「て」はない]

(144) 6行目「子分よりもらい食す特製品」 → 「子分ヨリ [合字] モラヒ合ス特製品」

(145) 9行目「主としてこれに由ることと存じ候」 → 「主トシテ [合字] 是レ由ルコト [合字] ト存候」[書翰原本には「これに」の「に」の文字はない。編者が補った可能性がある]

書翰番号82

230頁

(146) 8行目「それがため書状を差し控えてさし上げず」 → 「ソレガ為メ、書状ヲ差控テモサシ上ズ」[書翰原本では、不用だと思われる「モ」が書かれている。『全集』では、ここに「モ」があるとおかしいので、削除したものと推測される]

231頁

(147) 1行目「秘法の靈驗灼然と自得しおるう

ち、二十日より雨期にて」 → 「秘法ノ靈驗灼然ト自得シ居ル内、二十日ヨリ [合字] 満期ニテ」

[ここは、熊楠が瑜伽の秘法を修めている内容で、その秘法が二十日に満期を迎えたということである。「雨期」では何のことか分からないことになる]

232頁

(148) 4行目「瀬戸の京大の臨海研究所」 → 「瀬戸京大ノ臨海研究所」

233頁

(149) 9行目「当地と文里湾の中途みこの浜」 → 「当地ト文里港ノ中途ミコノ濱」

書翰番号83

234頁

(150) 15行目「翌日東京へ帰られたはずに候」 → 「翌日東京へ帰ラレタル筈ニ候」

書翰番号84

235頁

(151) 10行目「次に一月三日朝九時十分貴状一本拝受。本月十五日午後四時五分に」 → 「次ニ一月三日朝九時十分、貴状一本拝受又本月十五日午後四時五分ニ」

236頁

(152) 12-13行目「藤岡氏当県知事になって来任」 → 「藤岡氏当縣知事ト成テ来任」

(153) 14行目「御手植樹なりとも都合により移転して可なり」 → 「御手植樹アリトモ都合ニヨリ移轉シテ [合字] 可ナリ」

238頁

(154) 9-10行目「この状に泄れたるところは」 → 「此状ニ泄タル所々ハ」

書翰番号85

240頁

(155) 10行目「貴人に献上などには不向き勿論なり」 → 「貴人ニ献上ナトニハ不向キ勿論タリ」

書翰番号88

245頁

(156) 7-8行目「これはなかなかの良品と見受け候」 → 「是ハ中々ノ良品ト見受ケ申候」

書翰番号90

249頁

(157) 13行目「娘髻丹後の一色氏を殺し」 → 「姉髻丹後ノ一色氏ヲ殺シ」

(158) 14行目「それゆえか死極に痴呆性になり了りし由」 → 「ソレ故カ死ニ様ニ痴呆性ニナリアリシ由」

書翰番号91

251頁

(159) 1行目「父母が生み付けくれたる歯はこの一本のみなり」 → 「父母ニ生付ケケレタル歯ハ此一本ノミアリ」

255頁

(160) 7行目「高価と朝鮮でもっぱら聞いたとて」 → 「高價ト朝鮮デ専ラ聞クトテ」

書翰番号92

256頁

(161) 17-18行目「宜しく御願ひ申し上げ候。しかして必ず書留郵便にて御送り下さるるようお願い上げ奉り候」 → 「宜シク御頼申上候而シテ [合字] 必ラス書留郵便ニテ [合字] 御送り

被下候様奉願上候」

[書翰原本の「被下候様奉願上候」は「下され候よう願ひ奉り候」となるはずである]

258頁

(162) 3-4行目「その辺の費用の多少減ぜしは悦ぶに堪えざるようなれども」 → 「ソノ辺ノ費用ノ多少減ナレハ悦フニ堪タル様ナレドモ [合字]」

[その他にこの書翰では、「早々敬具」の後に追而書が存在するが、『全集』では全て削除されている。削除部分は次の通り。なお、史料中の下線部は書翰原本のままである]

(163) 「往年ノ貴問ニチユルトイフ様ニ聞エル短カキ単語デ洋人が別ル、トキ [合字] ニ挨拶スルコト [合字] アリ何ト発音スルモノカトアリシガ、小生一向心当り無しシ、然ルニ此頃ナニカノ洋書ヲ読ミシニcheruトイフ語ヲソナトキ [合字] 二用ヒシ例アリシ、別ニ其時氣ニ留メナンダカラ控エオカズ、何ノ書ニ出シカラ覚エズ、只今粹 [カ] 語ヤ近古語ノ辞典ヲモタヌ故分ルベキ様ナキモ、多分コレハ仏語ノcheri (シエリ) ト同根ノ語デ英語デ申サハ^{チェリツシュト}cherished; beloved; my dear 等ニ当り日本デ申サバ糸シガル、糸シト思フ等ニ尤モ近キ詞ト被察候、タシカナラスコト [合字] ナガラ一寸申上置候慣用上ヨリ [合字] 考フルニ愛スル上ニ^{シヌ}僣^{シヌ}プ乃チ思ヒ出サヌヲ忘レネバトイフ意ヲ兼タル詞ヲシク候、(久シク心中ニ蓄ハヘル、執著スル杯井上十吉先生ノ英和大辞典ニアルガ、東涯先生ガ熟妓ヲトシヨリノユウヂヨト釈セシヲトシマデ十分ナルニト風来山人ガ笑フタ由、

「ヒンマガル」「チヾレル」

[図] [図]

curl ト crisp

ノ區別ガ甚ダ(俗語ノ外デハ)譯シ難キ如ク、トシマト丈デハ素ウ人、地女ニモトシマガアルカラ風来ノ評モ妥当ナラズ菌ノ記載ナトニハ英語(況ンヤ日本語ヤ拉丁語)デハ表明シ難キコト [合字] 多シ、ソレト等シク、執著デハ cherish ヨリ [合字] モ烈シ過ル久シク心中ニ蓄ヘルハ取モ直サズ^{シス}僣^シブコト [合字] ナガラ、トシヨリノユウヂヨト同ジク長キニ過ギ候、言語ノ正解ハ六カシキコト [合字] ト存候

英語ノ the テフ冠辞ヲ近年文部省等デザトヨマセ候、小生ハ神田乃武男ヨリ [合字] ゼト教エラレ候、z to dノ中間ノヤウナ発音ナリ壯時諸国デ英人ノ発音ヲキ、シニ皆ナソノ通りナリシ、ザトイフ発音ヲ一度モ聞カザリシ、然ルニ大正十一年貴下ト六鶴氏ト三人日光湯本ニマイリ南摩旅館ニ居シ隣室ニ洋人二人(顔ヲ見シニアイリツシユラシカリシ)ト十六七ノ日本少年ト泊リアリシ、沼田ヘ下ル由ニテ翌朝出立ナレ [カ] 故長キ間ダノコト [合字] ニ非ズホンノ [カ] 一夜泊リナリシ、ヨホドノ豪家ノ子ニテ右ノ洋人二人ヲ傳トシテ [合字] 同行セシメ其間ニ英語テ會話ヲ実習セシムル親ノ用意ト見エタリ、聞クトハナシニソノ會話ヲ耳ニスルト、其少年ザ、ルーム、イズ、スモール (the room is small) ザ、ライト、イズ、ウキーク (the light is weak) 杯イフ、而シテ [合字] 之ニ応スルニ洋人モ亦必ラズ the ヲハツキリト za ト発音セリ、ソレカラ数年シテ [合字] 例ノ中村啓次郎氏(此人ハ外国語ハ一切出来ズ)ガ田中内閣ヲ解体セシメシ例ノ In the name of the nation ノ the ヲ衆議院ノ筆記(官報)ニイン、ザ、ネイム……ト明カニ書キアリシ、ナニカ欧洲ノ学者ガ the ノ発音ノ特別詮議ヲナシテ the ハゼト発音セズザト発音スベシト議決デモナシ、ソレニ

抛テ近来文部省ナド之ヲザト改音セシコト [合字] ニ候ヤ、又今日東京辺ニアル英人ハ多分 the ヲザ若クハソレニ近キ音ニテ話スコト [合字] ニ候ヤ御一答ヲマツ 早々敬具」
[この英語に関する部分を削除したのは何故なのか、その理由は不明である]

書翰番号93

259頁

(164) 16行目「かの園の役員中精力旺盛なる人に頼み」→「彼ノ園ノ役員中精力旺盛ナル人ヲ頼ミ」

260頁

(165) 1行目「全然関係を致さずに罷り在り候」→「全然関係ヲ得ズニ罷り在り候」

書翰番号94

261頁

(166) 6-7行目「向後時々申し上げべく候」→「自後時々可申上候」

262頁

(167) 7行目「文部省『天然記念物調査報告』植物之部第六輯」→「文部省、天然紀念物調査報告 植物之部第十六輯」

書翰番号95

265頁

(168) 4行目「およそ不出来なりしことに御座候」→「概シテ [合字] 不出来ナリシコト [合字] ニ御座候」

(169) 17行目「婦人の腹中の瘡を治した話」→「婦人ノ腹中ノ瘡ヲ治セシ話」

書翰番号96

269頁

(170) 5行目「仏教にいわゆる刀風の」→「仏経ニ所謂刀風ノ」[熊楠は、よく「仏経」という語を使う。これは、仏典のことを示している]

書翰番号97

271頁

(171) 2行目「拙児の食料など鯛二疋と飯少々」→「拙児ノ食料杯鯛二疋ニ飯少々」

272頁

(172) 3行目「画は京阪から神戸まで行なわれ」→「畫ハ京阪カラ神戸迄モ行ハレ」

(173) 8行目「精神病院を出すにはいろいろ故障あるものの由」→「精神病院ヲ出スニハ色々ト故障ノアルモノ、由」

273頁

(174) [書翰原本には、本文が終ったあとに、追而書があるが、それが全て削除されている。以下の部分は、「匆匆敬具」のあとに記されているものである。なお、下線は原文による]

「香道ノコト [合字] 本邦ニ傳フル所ロソレ [繰り返し記号] 由緒アルニヤ、古ク書物ニ見エタルマナバン (多分平安朝ノ物ニモ見エタリト存候) ナル名詞此頃何国カニアル由何カデ見出シヒカエオキタリ只今ハ問ニ合ハネド其内見出シ可申上候

一月十七日頃作ラセタル繩卷鮓ヲ小畔氏ヘ送一昨日頃開キ試ミ貫ヒシニ風味変ラズ但シ外面ニ少シカビ生エアル由、(餅等ニハエルカビノ ^{音白}glaucousナルトカハリ ^{碧綠色}aeruginousナリ、西洋デ通人共ガチーズニカビノ生エタルヲ特ニ賞味スル如ク以前ハ此カビノ生タルヲ特ニ好ミシ人

当地ニアリシト聞ク、) 電信ニテ昨日及今日小畔ヨリ [合字] 報知サレタリ古老ニ聞シハ春日迄繩卷鮓ヲ置クト干菓子如キモノニ風化スルソレヲ茶菓子トシテ [合字] 京都及ヒ阿波ノ人ガ特ニ賞美スルトノコト [合字]、然シ小畔氏所報ノ如クナレハ中々急ニハ風化セヌモノト見エ候、拙妻イフニハ干菓子ノ如ク風化セシメントナラバ風通りノヨキ向陽ノ所ニ吊リ下ゲオクガ宜シカラントノコト [合字] ナリ来年貴方ヘオクリ試ミイタツクベク候、 早々敬具

菌類ハ発表ノ為メ色々苦辛シ候所口大正十年秋末高野山ヘ楠本秀男氏ト同行セシ分迄悉ク命名シ了リ候、同十一年日光所集以来今日迄ノ分ハ命名未済ノモノ多シ、命名ニハ一切地名ヲ取ラズ、人ノ姓名ヲ採ルコト [合字] モ少ナシ、拉丁語ヨリ [合字] ハ希臘語ノ方多ク候、ソレガ為希臘語殊ニ上達致候語ノ数ニハ限りアリ中々英語如ク多カラヌモノ故数千ノ種ニソレ [繰り返し記号] 名ヲ付ルニハ(地名ヤ多クノ人名ヲ取ラズニ) 中々骨ガ折レ候、然シ語学ノヨキ稽古ニハナリ候、

今年二月廿七日ノ「日本」新聞紙ニ出セル拙文「令息隨筆」(一)ハ御覽ニ相成候哉コレハ例ノ家ダニ一條ヲ敷衍セルモノナルガ、家ダニヲ敵地ヘ撒布シ男女ヲシテ [合字] 春情ニ堪ザラシメ、其陽物ヲ直径ニ寸五分程ニフクラセ、馬ノ物亦膨張シテ [合字] 腹ヲ鼓ツ音ヤカマシクテ號令聞エズ大敗軍セシムル、小生少時上方ニテ好色者ヲアイツハ赤ジヤト申セシ伊豫ノ河野通有ハ元寇来侵ノ前ニ七年内ニ敵軍来ラズハ此方ヨリ [合字] 進撃セント三島明神ニ誓紙ヲ捧ゲ焼テ粉ニシテ [合字] 七枚迄ブーデ呑ダト申ス又橋本左内ハペルリ来リテ数年ナラヌニ軍艦ヲ作り此方ヨ

リ [合字] 外国へ交易ヲ強要ニ往ント首張セシ由、小生亦家ダニヲ以テ此方ヨリ [合字] 赤化ト出カケントイフ名案ナリ、貴下マダ御一読無クバ御申シ越被下度候

[紙が尽きたので、ここから書翰袖の部分(冒頭部分)に、続けて書き記している-雲藤注] 岡氏出板ノ約アル稿本ハ今モ二冊分編纂ヲ続ケオリ忒ノ方一段方付バイヨ [繰り返し記号] 急ギテ脱稿ノ上貴下御躬ヲ提ヘテ御談判被下度、モシ岡氏即時ニ金子ヲ貴方へ渡シ得ズンバ兼テ同氏ニ渡シアル原稿共貴方へ引取り改造社へ御談判被下度候社主島中雄作ハ小生ノ旧知田所氏ノ聲ナリ毎度拙稿出板ヲ望ミ来レルナリ]

おわりに

以上、『全集』と書翰原本との比較検討をしたが、書翰原本が残存していないものがあることと、さらに紙数の都合で別巻1所収の上松翁宛書翰の異同全てを掲載することはできなかった。

本稿で検討対象とした『全集』収録の書翰は、63通(9巻は13通、別巻1は50通)である。これら『全集』と書翰原本との異同は、次の3つに分類できる。

1. 単純な誤読・行飛びなどの事例

この場合が、大半である。行飛びの事例として(6)では、書翰原本に「彼件ノ形……………彼件ノ形ヲ」とある二つの「彼件ノ形」を一つにして、「……………」部分の文言を結果的に削除する形となっている。このような例は他に(47)にも見られる。

2. 熊楠の文章が不正確なために編者が配慮して直したと思われる事例

(44)では、書翰原本に「短カニ此世」とある。

ここでは、おかしな文章になるので、『全集』では「短きこの世」と直している。このような事例は他に(35)・(59)・(62)・(91)・(92)・(124)・(129)・(130)・(138)・(142)に見られる。

3. 意図的に書翰原本の一部を削除している事例

これは(1)・(2)・(4)・(22)・(30)・(82)・(102)・(109)・(135)・(163)・(174)である。

この内、(22)と(30)は精神病を患う長男熊弥の記述に関係する部分を削除している。『全集』の編集段階では、長女の南方文枝氏などが存命であったことによる配慮だったのかもしれない。ただし、熊弥の病状に関する記事は、乾元社版南方熊楠全集では削除されているが、『全集』では、多くの場合そのまま掲載している。したがって、ここの部分の削除の理由は、実は判然としない。

また、(82)・(102)・(109)は、図を注記無しで削除している例である。図が存在していないかのようにするため書翰原本の文言を削除、あるいは原文に無い文言を付加するといった改変をしている。

信頼性が高いとされている『全集』であるが、以上のような改変が存在するのである。したがって、他巻所収の書翰も書翰原本がある場合は、それを参照するべきであろう。

[投稿受理日2012.5.26 / 掲載決定日2012.6.21]

引用文献

- 伊藤彌彦 2004, 「岩波文庫版『新島襄書簡集』と新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』の異同について」, 『同志社談叢』24号
 雲藤等 2012, 「南方熊楠史料集の問題-二つの全集を中心として-」, 『熊野』142号
 『南方熊楠全集』9巻・別巻1, 平凡社

上松翁宛南方熊楠書翰（顕彰館所蔵，書簡0091-0098, 0102・0104・0108・0113・0116・0120・0121・0123・0129・0135・0138・0140・0155・0161・0168・0173・0175・0176・0180・0185・0189・0194・0197・0201・0204・0209・0211・0213・0223・0227・0231・0232・0246・0250・0259・0266・0267・0277・0279・0282・0291・0293・0298・0299・0301・0303・0306・0310・0312・0315・0316・0318・0334・0338・0341・0348・0355・0357・0361）

平沼大三郎宛南方熊楠書翰（顕彰館所蔵，書簡1892・1894・1910・1968・1969・1974・1975）

服部広太郎宛南方熊楠書翰（顕彰館所蔵，書簡1878・1880）

未刊行史料の掲載を御許可いただき，南方熊楠顕彰館には，感謝申し上げます。